道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

お側にいるだけで幸せ♪弘前の「森のイスキア」にて。

三好礼子
エッセイスト・国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

穏やかで聞上手だけれど、実はジョークが大好きな初女さん。

「間違ってないかな、私」「初女さんだったらどう思うだろう」。離れていてもいつも心に在り、私にとって大きな存在だった佐藤初女さんが、この2月に94歳で逝去なさいました。おむすび、青森、イスキアとくれば、「ああ、癒しの空間を作っている女性」とピピンと来る人も多いでしょう。最後まで天職を全うされて大往生だった初女さん、最期も凛として美しいお顔だったそうです。

私の口癖は、「どんな分野でも（もちろん道路も）、この世の基本は、母性＝愛」です。かつてタヒチで親子クジラと一緒に泳いだ時に、その荘厳さと愛情という名の光のシャワーの凄さに、「これを超えるものがこの世にあるのだろうか」と衝撃を受けたからです。でも、一体どうやったら具現化できるのかと悩んでいた頃に出会ったのが初女さんでした。2001年に、みんなが集まる場として、築40年ほどの酪農事務所を改築してフリースペースを作りました。その完成記念で自費上映したのが、龍村仁監督の「地球交響曲（ガイアシンフォニー）第一番」。この映画は大成功で、さあ次は第二番を上映と思った時に、そこに出演者として登場する佐藤初女さんと繋がったのですから、びっくり。

すべては食のご縁でした。私が合鴨農法で黒米を作っていたこと。かつて岩手の酪農関係で出会った方が、合法で濁酒を製造していたこと。そのご家族が初女さんと近しく、すぐに連絡してくれたこと。そして私の友人が、ガイアシンフォニーの制作スタッフだったこと。多くのご縁が重なり、私の黒米が岩手で濁酒となり、初女さんの元へみんなで運ぶというミニイベントになりました。

昭和37年頃から悩みを抱えた人々が初女さんの手料理を食べ、話を聞いてもらい、癒されて帰っていったという原点でもある弘前のご自宅（弘前イスキア）に伺うと、前夜から準備していてくれたお昼ご飯が用意されていました。どれも驚くほど美味しくて、感動しながらお話をたくさんし、夢のようなひと時を過ごさせていただきました。丁寧であること。気負わないこと。準備は最善を尽くす。拘りすぎず、ありのままの自然体で。「癒しのスペース」のヒントをたくさん頂きました。お別れする時に玄関で握手したら、その温かさと柔らかさに勝手に涙がボロボロこぼれ、収集つかなくなって慌てましたが、初女さんとはそんな人なのです。

2003年10月、富士宮市で開催された初女さんとのイベント。手作りで美味しくて誰もが幸せに♪

クリスチャン（カトリック）で、マザー・テレサと並べられることも多かった初女さん。小学校教員や染色工房での指導経験、結婚し子供を授かったものの、様々な辛いこともあったと聞きました。近書「いのちをむすぶ（集英社）」の扉に書かれていたのは、「苦しみから立ち上がるには、人のために働くことです。喜びに満たされたときにも、人のために働くことです。人のために働き、人に喜んでもらえると、なにものにも代えがたい、深い感動に満たされます。それは、誰もが持つ天性です」。私が講演会で一番響いたのも、「奉仕とは、余っているからとか、お金があるからとか、自分がしたいことだからではなく、相手が望んでいることをさりげなく差し出すこと」という言葉でした。いつもこれを思い出し、「あ、いかん」と、差し出すものを代えたりするまだまだの私・・。

想いが自然とカタチになったという岩木山の麓にある「森のイスキア」には、毎年大勢の方が訪問し、スタッフと共に食で受け入れてきた初女さん、大忙しの中最後まで呼ばれれば国内外を飛び回っておむすびを握っていました。私もご縁ができたので以前住んでいた朝霧で講演会と上映会を、意気込み、地元「富士宮やきそば学会」の中枢に話すと、みんなノリに乗って下さり、市民会館で200人が集まって全員でギネス記録？というようなおむすび握り＆講演会が開催され、大成功を収めました。この時に言ってくれた言葉ほど私を勇気づけてくれたものはありません。「礼子さん、貴女ならきっとできますよ」。はい、また号泣です。

著書も山ほどあり。ゆっくりじっくり想いを込めて書いてくださったサインは宝もの。

初女さんには大女優や国のトップやローマ法皇たちを全部合わせたようなすごい魅力がありますが、それを一言でいうと、やっぱり「母」。地球の母の思いは、食や暮らしの中で男女を超えて伝わり、それらの人が生き生きと社会を作る。健康で笑顔溢れる地球こそ彼女が望んでいた世界。いずれあっちの世界でまた会えますが、「礼子さん、やっぱりできましたね」と言ってもらえるよう、もうちょっと頑張らぼね。初女さんの歳まで37年。

最後に印象的だった言葉をいくつか。「揺れていい」「愛とは受け容れること」「今を満足する心」「祈りとは生活そのもの」「めんどうくさいという言葉は嫌い」「今を変えたいならば、恐れず一歩を踏み出す」「ただ無心に握っているだけ。本当にお伝えしたいのは、握り方ではなくて（信仰とはなにか）ということなのです」。初女さんの思い、みんなの中でしっかり結ばれてますよ。合掌。

リヤカー部隊が地域を元気に

フリージャーナリスト
湯浅玲子

春は新しい学校や会社に進む人もたくさんいるでしょう。私が学生時代を送ったのは福岡市内の西新という街でした。福岡の西の副都心として発展し、大学や高校が集まる文化的な街として知られています。今でも西新を訪れると何だか懐かしい気分になりますが、学生時代を送ったことだけが理由ではありません。今や市内でほとんど見られなくなった光景が西新には残っているからです。それが西新中央商店街のリヤカー部隊です。

商店街が歩行者天国となる月曜～土曜の13時～19時、道路の中央に10数台のリヤカーが並びます。あちこちから集まってきたリヤカーには福岡近郊でとれた野菜、果物、魚介類、花などが山と積まれており、さらにリヤカーを引くおばちゃんたち手作りの漬物や味噌、餅なども売られています。どれも安くて新鮮で、地元の人だけでなく遠方から買い物に来る人もいるほど。リヤカー部隊は商店街の大きな魅力のひとつなのです。

加えて楽しいのが売り手のおばちゃんたちとのやりとり。高齢の女性が多いのですが、みんな本当に元気です。顔なじみになると「これも持っていき！」とおまけしてくれたり、久しぶりのお客には「元気にしとった？」と声をかけるなど、とにかく賑やかで笑い声が絶えません。このリヤカー部隊が地域の活気を生み出していることは間違いありません。

西新中央商店街はかつての唐津街道沿いに発展した商店街で、隣接していくつもの商店街がつながっています。福岡の街を横断する唐津街道沿いの商店街は、その多くが古い商店街となってシャッターが閉まっている通りもめずらしくありません。そんな中、西新の商店街は今でも非常に活気があります。

西新のリヤカー部隊は戦後の1950年頃から始まったとされます。露天商としてリヤカーが集まり出し、一時期は100台を超えていたそうです。当然ながら道路使用の問題などがあったため、1967年には「西新行商組合」を結成し、営業を許可制として出店時間などが取り決められました。以前はよその街でもリヤカーの露天販売を見かけることがありましたが、これほど多くのリヤカーが集まっているのは現在では西新だけです。

とはいえ売り手の高齢化や後継者不足で数が減少してきていますが、新たにリヤカーでサンドイッチを販売する外国人が登場するなど、新しい世代も出現しています。地域の人々の交流の場ともなっている西新のリヤカー部隊。さまざまな人が参加することで、今後もぜひ続いてほしいものです。

（写真提供：福岡市）

商店街が歩行者天国となる時間帯に出現するリヤカー部隊

生鮮品から手作りの加工品まで安くて美味しい商品が並ぶ

ハッと思いました

四月は、何と言っても、新一年生の入学の景色が目に浮かびます。在り来りですが、校庭の桜の木の下で一世一代のお粧をした両親とキラキラ光るランドセルを必死で担いで楽しげにも緊張している子供が記念撮影をしている、理屈なしのベストショット。

そんな事を思っていたのは、休日のホームで春めいた街並みを身ながら電車を待っている時でした。その時、「あぶないよ」、「スマホ身ながら歩くと・・アブナイよ」と女の子の声でした。振り返ると、おばあちゃんの服のすそを掴んだ4～5歳の女の子が注意していました。その声におばあちゃんは「・・んっ・」と生返事で顔を上げるでもなく・。危険な事態が我が身に降りかからないと分からないのかねぇ。その時にはすでに取り返しがつかないのだけども。

子供は見ています。大人の言動をよく見ています。そして、マネをします。特に親の言動は子供にとって絶対的なもので、正しい事としてマネをします。

大人の責任の大きさをしみじみ感じますね。

ところで、自転車の交通ルールが昨年六月から厳しくなりました。無灯火、二人乗り、信号無視、一時不停止、歩行者の間をすり抜ける危険な走行、飲酒運転など、作年度の取り締まりで指導警告されたのが約一七二万件、検挙数が約八千件。把握されている自転車の台数は一昨年度で七一五五万台あると言いますから、まだまだ取り締まりは強化してもよろしいのでは。

自転車にやっと乗れるようになったサイクリスト一年生も増える時期なので、当然、自転車に乗ってる大人の所業を子供は見ています。

毎年のルーティーンの様な交通安全週間をお金をかけて実施することよりも、日々の生活のなかで、交通安全への意識をもち続ける事が重要です。どうしても〇〇週間がやりたいのなら、いっそ〇〇年間にして、やり続けたらどうでしょうか。

毎度のことですが、幸せのベストショットが、未来に待ち受けるもっと大きな幸せへのスタートなんだなあ。永遠でであって欲しいと思っています。それを実現させることができるのは、運でも運命でもありません。我々大人の役目です。

明るい未来とは、子供がすくすくと健全に育つことが唯一無二の事だなあと思う今日この頃です。